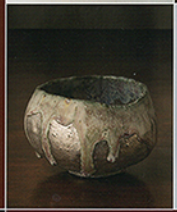
炎芸術
見て・買って・作って・陶芸を楽しむ
No.121
2015 春

特集
MINO
美濃・新世代の陶芸家たち

陶芸を見る：中島晴美／重松あゆみ
村山健太郎／梅原育子
陶磁の至宝 高麗茶碗
柿右衛門展
色絵磁器の名陶 九谷焼展
陶芸を買う：今すぐ買える陶芸の逸品
陶芸を作る：作陶入門講座「顔料を使った装飾技法」
漆工芸入門講座「高蒔絵でブローチを作る」
陶芸用語辞典ハンドブック
"HONOHO GEIJUTSU" English Summary



手作りで生まれる現代の急須

陶に「美濃」と呼ばれる岐阜県東濃地方は、全国でもっとも食器の生産量が多い窯業地としても知られている。現在では多くの個性的な作家を輩出している伊豆周辺陶磁器意匠研究所も、その前身は美濃地の上絵付の加工を行う職人の養成校であったことからもそれがうかがえる。

その意匠研で職員としながら制作を続ける駒井正人は、2011年に開催された第9回国際陶磁器展美濃に里と自からなる茶器のセットを4組出品し、みごとグランプリを射止めた。この回の公募展では、陶芸作品を選考する「陶芸部門」と量産を前提としたデザイン作品を選考する「陶磁器デザイン部門」の両部門から一点大賞を選ぶことになっていた。そのため、どちらかというとオブジェのような造形性の高い作品が評価されてきたこの公募展で、駒井氏の作品が大賞に輝いたことは意外な驚きをもっても急須や土瓶といったものが主でその最期から出ることはない。こうした器は、お湯を入れ、それを湯呑に注ぐためのものなので、茶漉しや注ぎ口の位置などにも配慮しなければならず、「制約」が非常に多い。氏が創作活動をするうえで、あえてこのような制約の多いものを選んだのはなぜか。その答えをたどっていくと、学生時代の陶芸体験につきあたる。

駒井氏も陶芸の出合いは大学時代、入部した陶芸サークルで初めてロクロを挽く体験をしたことから始まる。その体験は自らの手で何かを作るということがなかった氏にとって驚いたもので、「面白くて面白くてしかたがなかった」と語る。そして大学卒業後、本格的に陶芸を学ぶために意匠研に入所する。氏はそこで職員をしていた中島晴美や前田晴一、原山健一といった、立体造形の表現を追求する作家に出会い、現代陶の作品を間近に見る機会を得た。それまでもっぱらデパートで伝統工芸風の作品ばかりを見てきた駒井氏にとってそれは新鮮な驚きだった。当然触発され、卒業制作では実際にオブジェのような造形作品を作ってみたが、しっくりこなかったという。一方、課題制作で取り組んだ急須は、心地よく作ることができたと語る。「オブジェのような造形作品は自分にとっては表現の度合いが強い。自分は、きっちり使えるものを作りたいというのがベースにある。その中で自分なりの表現をかすかに出すことができればそれで充分です」

急須を作るテンポ、ペースも自分に合っていると語る。急須はボディの部分を最初に挽いて、その後、口、取っ手、蓋などを作り、くっつける。薬するのに手数が多く、作るのに手間がかかる。しかし、その手間が色々なことを考えながら制作したい自分に合っているというのだ。「碗や体と異なり、急須はパーツを組み合わせて全体像を考えなければいけません。いかに造形的に美しい一つの作品に仕上げるかを工夫する面白さがあります」

実用性から考えられた氏の作品には、一方で一瞬で作れればよいのではと」という声もある。確かに、造形的に美しい用の器を作りたいのであれば、陶磁器デザイナーのように、CADか何かのソフトを使って自分の理想とするフォルムをデザインして、鋳込み成形をすればこと足りるのかもしれない。

しかし、駒井氏はそうしない。学生の頃から変わらず、自身にとっては、まず何よりも「手でものを作ることの楽しさ」と「ロクロを挽く楽しさ」が作品制作の動機になっているからだ。ロクロを挽いて土をのばしたり立ち上げたりしていくと、土が自分の好みの形に生まれ変わるときがあるが、そのひとつ時が氏にとっては無性に楽しい瞬間なのだ。

「ただただ仮使いやすいものが作りたいというより、経験をもとに作品を発展させつつ、なぜ自分がそうものをこんなにやりたいのかを問うことも含めて制作していきたい」と語る氏の作品には、陶芸そのものの魅力も込められている。

（水谷・坂戸受介）

駒井正人

1980年伊賀焼生まれ、2003年京都工芸繊維大学工芸学部卒業。05年多治見市陶磁器意匠研究所卒。所属グループ「ヴィエス」。東海現代陶芸（思考する新世代展）（愛知県陶磁資料館）、第9回陶磁器公募展グランプリ、12年度「岐阜県現代陶芸展」（岐阜県美術館）、14年、現代陶芸展（長崎県三城陶器意匠研究所）、現代・多治見市陶磁器意匠研究所勤務。